
異世界逃避行幻想譚～異世界人と巫女達と神々と時々邪神～

架引

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界逃避行幻想譚〜異世界人と巫女達と神々と時々邪神〜

【Nコード】

N3852Z

【作者名】

架引

【あらすじ】

この作品は、作者の作品『邪神を宿した少女と異世界の少年』のリメイク版です。

何の変哲もない高校生生活を謳歌していた少年は、突如発生した空間の歪みに巻き込まれ、異世界へとトリップしてしまった。

そこは神話の息づく、ファンタジーの世界。出会った少女を助ければ彼女はまさかの訳ありで、逃亡生活を余儀なくされて……しかも帰る方法無し!？

ファンタジーな世界に迷い込んだ高校生と訳あり巫女達の逃避行

を描く物語、ここに誕生です。

プロローグ

とある日曜日。俺、かくら<ruby><rb>神楽有馬</rb><rp>(</rp><rt>ゆづま</rt><rp>)</rp>></ruby>(18歳)はその日、近くのコンビニで昼ご飯を買って、家に帰る途中であった。

冬も半ば、厳しくなってきたこの時期。俺は煮込み餛飩を購入し、身体の内側から温めようとしていた。

「こついつ寒いときはラーメンでも良いんだけどな……」

などと言いながらも餛飩を選んだのは、何となく、である。実際、俺の好物は麺類だが、何を食べるかはその時の気分によって、餛飩、蕎麦、中華蕎麦、パスタなど様々だ。

「しかし、今日はいつもより幾分風が冷たいな」
そう愚痴をこぼしながらも、足取りを確かに、自宅へと足を進める。

早く、寒い外から暖房の効いた室内へと入りたいという意思の表れか、幾分歩調が速いのは気のせいか。

しかし、コンビニから出て五分程度経ったところで急に体に異常を感じた。

(何だ、これ……)

いや。異変があるのは、自分ではなく自分の周囲だろうか。

最初は、眩暈かと思った。だが。違った。世界が、歪んでいる。まるで波立つ水面を見るかのように、周囲の光景が浮き沈みしているかのような、皺が出来ているかのような。とにかく形容しがたい歪みが、視界全体、見回す限りに広がっていた。

何だ、これは。そう思い、思わず足を止めてしまった俺は決して咎められるべきではないだろう。

やがて、それは重さに耐え切れなくなったかのように。

キキキキキキ……と、不吉な音を立てながら、ピキピキ、と

ひび割れていった。

本能で察してしまった。

これは、まずい……。何がどうしてどのようなことによって具体的にはわからないけど……。でも、かなりまずいっ！

これ以上ここに留まっていると、とてつもなく大変な目に遭う気がする、と。

だが、同時に、気付いた。……。逃げ場が、ないことに。

前後左右、四方八方どちらへ行こうにも、もう手遅れ過ぎた。

ひびは既に自分の周囲、果てには頭上まで球場に自身を包んでおり。もはや何処にも逃げる事が出来ない状態だった。

「何だよ、これ……。何なんだよ、これ……。……」

思わずその場で叫んでしまった。

いきなり周囲の光景が歪んだかと思えば何も無い空間にひび。立て続けに異なることがおきて。

俺はもう、既にオーバードロー状態、俺のライフはもう零だ。

そして。

そんなわけがわからず頭を抱え込んでいる俺を取り込んだままで。

……。パライイイイイイイイ……。……。と、空間は、抑え込んでいた力に耐え切れなくなったかのよう。

強烈な光を発して、爆ぜた。

「ん……。う、ああ……。……」

強烈な光が収まってから数分して、眩んだ目もやっと元に戻った。一体何が起きたのか理解が及ばないままに、しかし周囲がどうなったのか確認だけはしたいと本能の赴くままに目を開ける。

すると……。……

「……。何だ、何処……。……」

そこに広がっていたのは、石造りの、湿っぽい通路だった。

「え？　？　？」

そして。目の前には、鉄の檻と、その中に入れられ、枷を嵌められた、巫女装束の少女だった。

「……………はあ……………。マジ、何なんですかこれは……………」
もはや理解不能。もうどうにでもなれ、と開き直った。

ん……………。

頭、痛い……………。

ここ、は……………え？

牢屋！？

何で……………はっ！？そうだった、私、捕まっちゃったんだ……………。

私の名はシール「デストラクティ」。

一応……………とある『巫女』を務めている。

今朝、と言っているのかはわからないけど、目が覚めたら私は第一級手配犯になっていた。

新聞に載っていたのでそのことにはすぐに気付いた。

でも、理由はわからない。ただ、新聞を見た限りでは、市民に不安を煽り、治安を悪化させているのだ、在りもしないホラを吹いているのだ、散々な理由。しかもそのどれもが出鱈目だった。

とにかく、第一級といえば捕まれば弁解の余地なく処刑だ。

そう考えて、家の外に出た…まではよかったが、既に遅く、家は包囲されていた。

抵抗虚しく、私は取り押さえられ、暴れたものだから気絶させられてしまったんだっけね。

そして、現在に至る、と。

はあ……………。取りあえずは現状を確認したいし、看守でも呼んで説明でもしてもらおう。じゃなきゃ気が済まない。

「誰か！ 誰かいないのですか！」

……………。

返事は何も無い。うんともすんとも聞こえない。

はあ……これじゃ状況は解らず仕舞い、かな。どうしよう……。考えても致し方ない、か。それに第一級犯罪だと状況確認したところで結果は目に見えている。即ち、私が辿る運命は形だけの裁判をして処刑、というのに他ならないだろう。なら、何を考えても無駄だろう。

気落ちして、自分の腕を見る。正確にはその自由を奪っている枷か。

そこにあるのは、魔法……と言うより魔力を出せない、ということからおそらくは魔封じの枷だ。

魔法が使えなければ、私は雑魚も同然。

なら脱出も不可能。もとより一国を相手取るなど具の骨頂だからする気も起きないが。

致し方ない。もう一度そう結論付け、寝つ転がって頭の後ろで手を組んだ。……やっぱり枷がある分、いくらか心地悪いな。

「ん、ん………」

何もすることがなくて、何の気無しに手の甲の紋様？ を見た。

そういえば、この紋様は生れつきこの位置にあった。

これは、何なんだろうか。母さんや父さんはこれについては一切教えてくれなかった。

知らなくて教えてもらえなかったんじゃないかって、知っててなお、隠すかのように教えてもらえなかったって感じた。

何なんだろうか、これは。

ウーン……駄目だ。今は何を考えても増えるのは疑問ばかりだ。解決策が見つからない。

……いや、そりゃまあ、全うな理由で第一級犯罪、それなら理解できるけど？

心当たりがないどころか、理由がめちゃくちゃじゃん！ そんなんで処刑されたんじゃないでしょ！

まあ、弁明の余地なく処刑台行きの私にはそんなこと言える立場

もない。

「はあ……………」

ため息をついて、再度頭の後ろで手を組んだ。

どれくらい時間が過ぎただろうか。

「暇だな……………ん？」

急に、奇妙な音が聞こえ、その音源の方を見れば、鉄格子の向こう側で空間に歪みができていた。一体何だろう。

気になってそちらを見ていると、次第にその空間自体にひびが入り。

……………パライイイイイイイイイン……………と、弾け飛んだ。

「きゃっ」

不自由な腕で顔を庇う。別に悪影響がなかったからよかったが、もし破裂した空間が固定されたままだったなら、破片が刺さって満身創痍になっていただろう。

そして、破裂した空間を見て、呆然とした。

何故なら。思いもよらない光景が、そこにあったからだ。

「え？ 人……………？」

そう、それは見たことのない服装の、白い袋を手に持った男性だった。

「……………はあ……………、……………」

そして、その男性は、意味不明な言葉を喋っていた。

1 - 1 脱走のお手伝い？

さて。開き直ったところで落ち着いて現状確認をしてみようと思
う。

まず、俺は昼飯を買った帰りに、何かわけのわからん現象にあっ
た。それは周囲の風景にひびが入って、その数瞬後に風景が割れて
気が付いたらここにいたと。うん、これについては情報を集めてか
ら考えれば良いとして。

問題はここがどこか、だよな。

俺はここで我にかえってから、一度も方向転換をしていない。そ
してそんな俺の目の前、真っ正面にあるのは……無数の縦線だった。
無限の縦線は触って見れば鉄製……つまりそれは牢屋の独房だ。
そして、その中では、巫女装束の少女がペタンと座り込んでこちら
を見ている。

この状況に思うことはいろいろあるのだが、とりあえず言いたい
のは。

「……………それで、これはまた一体どういうことなんだ？ 自
分が牢屋つてわけじゃないのは良いんだが……何でこんなイタイケ
な少女が牢屋ん中なんだ？」

まあ、考えたところで事情はわからないが。取りあえずは閉じ込
められていては可哀相なので、牢屋の鍵を外して柵も外してやる事
にした。

「……………鍵……………何処だ？」

出してやることにしたのだが。しかし、肝心の鍵が見当たらない。
何処にあるのかと辺りを見渡し、周辺を探し回り……何やらテー
ブルの置かれた小部屋の壁に、鍵がかけてあるのを見つけた。

喜々としてその鍵を取ろうとするが。そこでまたもや、厄介なこ
とに気が付く。

「……………あれ？ あの牢つて何て書かれていたんだっけ？」

そう。鍵の上に、文字のような数字のような、おそらくは数字なのだろう記号が振ってあったのだが、如何せん直前の怪奇現象で呆然とし、半分自失していたので良く見ていなかった。これじゃあ開けようとしている牢屋の鍵がわからない。まずったなあ。反省反省。再度、少女の入れられている牢まで戻って、記号を確認すると（因みに少女は怪訝そうな顔で再度現れた不審者「俺を見ていた」、再び鍵のところまで戻る。そして、今度こそ正解の鍵を取り、その鍵で牢屋を開けた。

「……………」
すると、少女は少し考えるような間を置いた後、牢屋の中から恐る恐る出てきた。何だよ、俺は何もしないぞ？

「？」
そして、俺に何かを聞いてくる。だが、少女よ。何を言っているのかさっぱりだぞ。英語はそれなりに出来る方ではあるが、これは英語ではない。もっと違う、他の言語だ。

これはいよいよ困ってきたな。出来ればここがどこなのか、出口を知っているなら道案内してほしいかったんだが。しかたないか。意思疎通できないと、無理だもんなあ、こればかりは。……仮に英語でも、意思疎通できるほど出来るわけではないのだけど。

「ゴメン。何て言ってるのかわかんないよ」

「？」

「……………本当に、ゴメンな」

何かを言ってくるが、言葉がわかんなければ返しようがない。そうなれば会話は出来ない。だから、意味がないとはいえ、謝罪を入れる。

少女はもう一度顔色を変えて再び何かを言ってきたが、それも勿論わからないので重ねて謝罪する。それで話が通じないとわかったのか、急に黙り込む。

だが。少女はまだ、諦めていないようだ。言葉の代わりに、ジェ

スチャャーで俺に意思を伝えてきたのだ。

少女はまず、枷を指差し、次に枷の鍵穴を指し。そして最後に鍵を回す仕種をして見せる。

『枷』『鍵穴』『鍵を回す』と来れば、答えは簡単だな。つまりは、枷を外してほしい、ということか。そういえばうつかり牢屋の記号見落としていたのに焦ってすっかり鍵の枷を忘れてたな。

まあ、どれが枷の鍵か、わかったもんじゃないから、俺に出来るのは、あの監視室っぽい部屋に案内して一緒に探してもらっただけだ。少女に目配せをして、先程の鍵が置いてある部屋へ連れていく。どうやらついて来てほしいという意図が伝わったようだ。

そして部屋へたどり着くと、少女は俺の意図が完全にわかったのか、勝手に部屋を物色し始める。

よほどこの部屋にあるかどうかに期待を寄せているらしく、かなりの興奮気味だ。

とりあえずは頼まれたからには、俺もこの部屋を物色することにした。

十分くらい経っただろうか。正確にはわかんないけどさ。

この部屋の中には、いろんなものがあった。羽根ペン、紙、インク、替えの蝋燭、わけのわからない文字で書かれた書類に液体が入った瓶、粉末が入った瓶。

最後の二つは何なのかわからんが、やばい薬だったら困るので放置したが。

そして、いくつかある棚のうちの二つを調べ終えた時点で、不意に服を引かれた。

「ん？」

そこには、鍵を持って、何かを懇願するような表情をした少女がいた。何を懇願しているのかは、聞くまでもないだろう。

見つかったかもしれないので、試してみしてほしい、ということか……まあ、自分で出来るだろう、って言葉も浮かんだけど飲み込ん

だ。言葉通じないし何よりわざわざ持ってきたってことはなにか理由があるのかもしれないし。

だから俺は何も躊躇わず、鍵を受け取り、差し出された腕に嵌められた枷の鍵穴に、鍵を押し込んだ。

そして、どんな鍵が枷の鍵かわからない手探り状態だったにもかかわらず。まさかの一本目の鍵で、少女の枷は外れた。

一瞬、啞然。と同時に、ほっとする。もし見つからなかったらどうしようか、という感情が少なからずあったし。そして、少女の顔を見て、顔が綻んだ。

それはもう、艶のある黒い髪に似合う、太陽のような笑顔で、その青い瞳を俺にむけてくれているのだから。

視線の先にいるのは先程現れ、理由は不明だが私を牢屋から出してくれたばかりの男性。

私的感想を言えば、理解不能の一言に尽きる。

何やらわけのわからない言語でつぶやいていたかと思えば、いきなり立ち去ってしまった。即座に戻ってきたと思えば、牢屋のドア付近を見回して、慌ててまた立ち去っていった。

そして、三度目に現れた時には牢屋の鍵を持っていた。そして驚くことに、私を解放したのだ。……枷があるから、正確にはまだ完全ではないけれど。

しかし気になる。この男が何故私のことを助けるのかが。第一級犯罪者なのだから、こんなことしても自身に不利益になるだけなのに。でも、助けたのは何故なんだろう。

考えてもわからず、

「何故私を助けるんですか？」

男に聞いてみたが、男は何にも答えなかった。

それどころかなぜか困ったような顔をした。聞いてはまずいこと、

だったのだろうか？ それはそれでさらに気になるけど……。でも話してくれないんじゃないかな。と、そんなことを考えていたのだが。

しかし、男のその話を聞いて、しかし可能性もあるかもしれないと思った。

済まなそうな顔で何かを言ってきたのだが、言葉は相変わらず何と言っているのかわからない。だからこそそう思ったのだ。

先程から喋っている謎の言語はもしかすると彼の国の言語なのではないだろうか。だとすればこの大陸で使われている言葉がわかるとは限らない。

なら、答えなかったのはもしかしたらこちらの言っていることも向こうには伝わっていないのではないか。

しかしまだその確証はなかった。だから、「ヴァルステイル大陸語がわかりますか？」と聞いてみた。

結果は……。やはり。彼はこの大陸のものでなく、

この大陸の言葉を知らない。

「困りましたね……………」

本当に、困った。

魔法を使えば何とかなるけど……今は使えない。

原因はやはり枷だ。この枷は魔力を体外へ出せなくする魔を封じる枷。自身に対する補助魔力ならともかく、他の魔法では使うことが出来なくなるのだ。

何とか意思疎通が出来ないものか……。

そう思い悩み、しかしすぐに答えは見つかった。

なんだ、簡単じゃない。枷を外す手助けをしてほしいということくらい、言葉じゃなくても簡単に表現出来る。

そう思い、私は枷を外してほしい旨を伝えた。

そう、それがついさっきのこと。

そして今は、その男に案内されて、監視室で枷の鍵を探している。牢屋の鍵があつたのなら、枷の鍵もあると思う、と言いたいのだろう。ありきたりだけど、ないと言いきれない。この部屋にも一応未使用の枷があつた。ならば、当然枷の鍵もなくてはならないはずだから。

絶対に、見付けてみせる。私は折角逃げ出す機会を得た。わけのわからない理由で処刑されるくらいなら、巫女としてあるまじき行為で会つても、破戒して生き延びて見せる。

そんな焦る気持ちで部屋を引っ掻き回していたら、

「……………つと、これ、かな……………？」

一本の、小さな鍵を発見した。

でも、これではまだ、例えそうだったとしてもまだ足りない。

魔封じの枷を外すには、これだけでは足りない。枷を外す鍵と人。これらが揃つて、初めて外れるのが、魔封じの枷の厄介なところだ。だからこそ、この男に協力を頼んだのだ。

私は一緒になってこの部屋で鍵を探してくれているこの男に近寄り、その特徴的な衣服を引っ張った。

「……………」

声をあげながら、疑問顔で振り向いてくる。が、鍵を差し出すとすぐに事情を察してくれたらしく。

私が見つけたこの鍵を、早速試してみてください。

結果は……………なんと、一発目で当たりだった。なんて幸運。やった！

顔が綻んでいくのが、自分でもわかる。これで、生きていける希望が、見つかったのだから。

1 - 2 疎通の魔術

少女を助けたのは良いが。意思疎通が殆ど出来ないからなあ。どうしたものか、困ったものだ。

とりあえずここはまだ牢。誰か来てからではまずいし、先ずはここから出よう。

幸い、出口らしい階段は本来なら看守がいるであろうこの監視室から出てすぐのところにあるのをついさっき見たばかりだ。

だから問題はない。と、思いたい。

さてさて、いつ看守が戻ってくるかもわかんないし、さっさと行きますか　と、歩き始めたら。

クイクイ、と服を再び引つ張られた。いや、そんなに服引つ張られると伸びるから止めてほしいんだけどさ。ほら、背丈が同じくらい……まあ、俺男でこの人女だから多少違うけど、大した違いがないんだから肩叩くとか別の形で意思疎通試みようぜ？

と、そんなことを心の中で思い浮かべて内心苦笑しつつ少女に振り向くと、少女は俺の額に手を添えて、何やらボソボソと呟く。

「……………?」

呟きが終わると同時に、少女の手が光り、そしてその直後に俺の体も包まれる。……今日は俺、良く光に吞まれるな。

「どうでしょう。言葉がわかりますか？」

「に、日本語!？」

んな!　馬鹿な!　さっきまでこの少女、わけのわからん言語をしゃべっていたのに、何で急に流暢な日本語しゃべっているんだ!　?　まさか、今まで俺、騙されてたのか!?　豊富秀吉より策略家だな、おい。いや、別に秀吉関係ないけど。

「わかるのですね、私の言葉が」

「ああ」

先程も聞いた、この鈴の音のような綺麗な声で紡がれるその言葉

は、どう聞いても日本語のそれだ。

「よかった。これでやっとまともな疎通が出来ますね。先程はありがとございました。魔術も扱えるようになりましたし、命も救われました」

「そ、そうか……それはよかったね……」

実際、目の前に監禁された女の子がいて、それを助けられないやつは社会的にダメだろ。

………って待てよ。今、それとなく妙な単語が入ってなかったか？

確か、魔術って………魔術、だよなあ。小説とか漫画とかで出てくる、不思議パワーのことだよな。因みに超能力でも可。って、それは今は関係ないな。

で、何故にその魔術？ しかもあたかも実在して、扱えることが当然であるかのような口調だ。これは一体………？

「なあ、一つ聞いていいか………？」

「………？ 構いません。が、何でしょうか」

「………魔術って、何？」

「え！？」

おおっ、こりゃすごい驚きようだ。

そんなに驚くことないだろうに。

「魔術を知らないのですか！？ 斯様な状況で何を冗談言っているのです、生活の基盤なのですよ！？」

え？ 生活の基盤？ 何だそれ？

「魔術って」

「 待つてください。この状況で話すのは些か無用心です。貴方だって、罪に問われるということを感じた上で囚人を脱走させるようなことをしたのでしょう？」

言葉被せられたよ。無理矢理話切られた。つか、囚人！？ この巫女さん犯罪者だったのかよ！ そして勝手に歩きだした。

「犯罪者だったのかよ！」

「目茶苦茶な冤罪を被せられているだけです。民に不安がらせる戯れ事を吐くなど巫女として言語同断。それ以前に、そんな理由で死刑罪に出来ると思いますか？」

「……………ん？」

「それ本当か？」

「ご信用していただくか否かは貴方次第です。が、私は嘘をついておりません」

「……………そうか。じゃあ、信じさせてもらおうかな」「え？」

若干間を開けたものの、あっさりと信じたことに疑問に思ったのだろう。

まあ、実際には少女の証言を吟味して、確証を得ただけだ。

それは今は別にいいだろう。それより、さっきの気になる言動。

もう一度聞き直さないと、なんか気が済まない。

魔術は如何にも日常的な存在です、なんて言動、信じられないのだが。正直いえば、それを聞いてから妙に嫌な予感しかしない。

「で、話逸れたけど、魔術って、オカルトじゃないのか？」

「まだそれを言いますか。と言うより、聞き慣れない言葉が出ましたが、おかると……………でしたか、何でしょう、そのおかるといっているのは」

いや、オカルトってオカルトだよ。他に言いようなんてねえぞ。

いや、あるか。あれだ、架空の存在だろ？」

「架空の存在じゃないのか？」

「……………」

全くもって当然の回答といわんばかりの俺の話聞いて、少女は一瞬、可哀相なものを見る目付きになる。いや、なんでだよ。

だが、次の瞬間には怪訝そうな顔をして、最後には物凄く真剣な顔して、歩きながら考え込み始めた。

忙しないというか何と言うか、まあ見ていて飽きないのは確かだ。そして、しばらくすると一通り考えがまとまったのか、深刻そう

な顔をして、俺に話し掛けてきた。

「一つ聞きましょう」

やっと腕が自由になった。うーん……やっぱり自由が一番いいよね。目が覚めてから多分だけど半刻も経っていない。だというのに随分長い間拘束されていたようで、この開放感もかなり久しく感じる。

助けてくれた……もとい、脱走を手伝ってくれた男に感謝をし、せめてここから出るまでは一緒に行動しよう。そう思って、男の方を見てみれば、部屋から出てどこかへ行こうとしていた。

なんて無用心な！ 罪人収容所は街中にあるだろうが、死罪を収容するところといえば、城しかない。何故知っているかといえば、知り合いがこの国の軍隊の、魔術隊にいて、そんな様なことを前に聞いていたからだ。

話が逸れたが、ようはここは城、それも首都なのだから王城。それなりに警備も厳しい。見張りに見つかっただらどうするつもりよ！ しかも見慣れない恰好だし言葉も通じないんだから絶対話が拗れる。

そう思い、慌てて服を引っ張って、引き止める。

男はすぐに振り向いてくれた。………何、その迷惑そうな目つきは……ああ！ そっか、そういえばさっきから服引っ張ってばかりだった。

ゴメン、と内心謝りながら、男の額に手を乗せて。

「聖なる加護の光、その力を以ってこの者の言語の壁を取り除け

……」

言葉を、呪いを紡いだ。

瞬間。私の手から光が発せられ、男を包み込んだ。

意思疎通の永続魔術で、一種の加護にも等しい。これでこの男と

言語による意思疎通が出来るはずだ。

だが、万が一効いていない、ということがあっては困るので、一応聞く。

「どうでしょう。言葉がわかりますか？」

「に、日本語!？」

男は心底驚いた、という顔で私を見てくるが、意外なことではないだろう。今まで散々別の言語で、言葉が通じないと思って諦めていた矢先のことなのだ。急に自国の言葉が聞こえてきて驚かないはずはない。

因みにこの男がこの大陸の言葉を話しているわけではない。男の言葉が示すとおり、男には聞いた話の内容が自国の言葉に聞こえるだけだ。さらに言えば私もそうだ。男の言葉がこの大陸の言葉に聞こえているだけで、男がこの大陸の言葉を喋っているわけではない。私自身ではなく男に魔術をかけたので、私以外の人がこの男と会っても同じ効果が得られるところがお得なのがこの魔術である。

「わかるのですね、私の言葉が」

「ああ」

念を押してもう一度聞いて見るが、大丈夫なようだ。

ああ、よかった。これでまともな意思疎通できる。

「よかった。これでやっとまともな疎通が出来ますね。先程はありがとうございました。魔術も扱えるようになりましたし、命も救われました」

「そ、そうか……それはよかったね……」

……いや。そんな当然のことをした、っていう顔で見られてもこっちも助かったのは事実だし……『そんなに感謝されても困る』なんて顔されるのもなんかいただけじゃないな。お礼はきちんと受け取るべきよ、少年。

そんなことを思っていると、不意に男が怪訝そうな顔をしていることに気付く。

「なあ、一つ聞いていいか……?」

「……？ 構いません。が、何でしょうか」

もしかして、何故あんな状況に、って言う質問だろうか。だとしたらなんて答えよう……。

「……魔術って、何？」

「え！？」

だが、そんな私の困惑を余所に、男が聞いてきたのはそんなどうしようもないことだった。

っていうかそんなわかりきったこと、こんな状況で普通、聞く？ 冗談でも言ってるの、この人は。

「魔術を知らないのですか！？ 斯様な状況で何をご冗談言っているのです、生活の基盤なのですよ！？」

「魔術って」

こんな状況で落ち着いて話すほどの余裕は、ないだろう。意味のない質問は控えるべきだ。男にもそれをわからせようと叱咤したがあるうことが、食い下がってきた。

……仕方ない。無理矢理終わらせよう。

「待ってください。この状況で話すのは些か無用心です。貴方だって、罪に問われるということを感じた上で囚人を脱走させるようなことをしたのでしょうか？」

そう言って、私は歩き始めた。

……あ、言ってから気付いた。さらりと重用なことを言っちゃったな。どうしよう……。

「犯罪者だったのかよ！」

やっぱり怒鳴り散らされた！ ……仕方ない、こればかりはミスだ。場所が場所、状況が状況だけに言い逃れは出来まい。大人しくすべて話して、出方を伺おう。

そう思い、自分が捕まっていた理由を話すと。わけわからない、とでも言いたげな顔で、

「それ本当か？」

と言ってきた。当然だろう。こんなこと、本気で信じる人は少な

いと思う。

「ご信用してくださるか否かは貴方次第です。が、私は嘘をついておりません」

男は少し考える素振りを見せた上で、

「そうか。じゃあ、信じさせてもらおうかな」

「え？」

あっさり信じてくれたようだ。

いやいや、それはいくらなんでも軽率過ぎないかい、少年。少しは疑わないと、そのうち騙されるわよ？

だが、少年はその話はそれで終わりと言わんばかりに話題を変えてしまう。

「で、話逸れたけど、魔術って、オカルトじゃないのか？」

……訂正。変えたんじゃなくて戻したただけだわ、これ。まだそんな冗談を……ん？ おかると？

「まだそれを言いますか。と言うより、聞き慣れない言葉が出ましたが、おかると……でしたか、何でしょう、そのおかるといっているのは」

「架空の存在じゃないのか？」

架空の存在。それがおかるとの意味……いやいやいや、それこそありえないよ。どうやったら生活の基盤足る魔術が完全に架空のものになるの!？

と、そこまで考えて、ふと今までの記憶を遡る。

男は確か、魔術は初めて知ったかのような顔をしてた。それに、疎通の魔術も同じ反応だ。初めて見た、という感じ。私のは永続的なものだからあれだけど、普通のもは冒険者の間では結構日常的で、別段驚くほどのものではない。

だが、仮にも魔術は生活の基盤、そうそう忘れるものではない。別の大陸でも同じ様だし、地域が違うから、というのでは通用しないだろう。

……なら、記憶喪失……？

いや、それはないだろう。記憶喪失になつていても言語が大丈夫ならば、魔術についてもすぐに再習得する機会に恵まれる。

なら、私と会う直前に記憶喪失になつた？

ありえない。何故ならそれにしては意識のありすぎる行動をしていただけからだ。

と、そこまで考えて。ある重要なことに思い当たる。

私と会う直前？

そう。重要な情報が、そこにあつた。

この男が、どうやって現れたのか。

それは衝撃的だったから目に焼き付いている。空間の、歪みだ。

ならば。記憶喪失以外で。魔術を知らなくてもおかしくない理由とは何なのか。

幸い、私は巫女。そういうことに関しては他よりは詳しい。それについては思い当たるものが一つ、ある。

でも、まだ、足りない。確証が、ない。だから。

「一つ聞きましょう」

確証を得るために、私は男に問い掛けた。

1 - 3 城からの脱出 逃走編

「一つ聞きましょう」

深刻そうな顔してそう言う少女からは、誤魔化しは一切なしにしてほしいという意図がひしひしと伝わって来る。

俺も真剣にならざるを得ない、そんな表情と声色を維持し、少女は俺に対する問いを紡いだ。

「この世界の名を、言ってみてください」

「この世界の名？ 世界に名前なんてないよな。まあ、強いて言えば、地球、かなあ。」

「地球、かなあ。世界の名前なんて、考えたことないし。強いて言えば、住んでいる惑星の名前が、そうなるのかな？」

「……その答え、偽りではないのですね？」

「え？ な、何だよ急に。変なこと聞いてくるな……」

そう答えると、少女は、やっぱりと、そう言いた気な顔で、伝えてきた。

「そうですね……。真に残念なのですが、結論から言わせていただくと、ここは地球という世界ではありません。故に、貴方の故郷も、ここにはありません」

「え……………」

その言葉に、俺は思わず言葉を失い、足を止めてしまう。

何だつて？ ここは、地球ではない？

「は、はは。冗談は、止してくれよ……。地球じゃなけりゃ、ここは何処なんだよ」

枯れた笑い声をあげながら、信じられない、信じたくない、考えを放棄しよう、という思いで心が満ち溢れるのがわかる。

「ここは、える」

「そこで何を……貴様は！」

だからか、少女の言葉を遮った何者かには、不覚にも感謝してし

まった。

「……………っ！ しまった！ 見つかってしまった……………！」

しかし、少女のその声に、ハッと我に帰る。そうだ。少女は確か、冤罪で捕まっていたんだ。そして、目の前にいるのは……………鎧を着た人だ。

少女は脱走犯で俺はその脱走犯と何の問題も無く行動を共にしている不審者。そして、この人はおそらく警邏中、もしくは牢屋に戻ろうとしていた看守の兵士。

状況は見るからに明らかで……………。

「だ、脱走だー！ 一級犯、シール＝フェルスファイアが脱走したぞー！」

兵士は大声で警戒を呼び掛けた。と同時に、剣を抜いて俺達に向き直る。

「あの、どうすんの、これ」

「……………取り合えず、逃げます！ こちらへ！」

少女は兵士のいないほうへ走り出した。幸いにもここは、丁字の分岐点だったのだ。

「道わかるのか!？」

「装飾を見た限り、ここは王城……………。私は幾度か城への所用で出入りしたことがあったので、幾分はわかりますが……………わかる区域までの辛抱です!！」

それは何と言うか、曖昧な。つまり、わかる区域までは完全に出たとこ勝負ってことだよな。

と言うか、前きちんと見ような。前方に何人も兵士がいるからな。

「どうやら不審者の手を借りて脱走したようだが……………逃げられると思うなよ、シール＝フェルスファイア!！」

どうやらシール＝フェルスファイアというのが少女の名のようだ。

しかしどうするよ、これ。前にも敵多数、後ろにも敵多数。逃げようがないぞ?」

「くっ！ 囲まれましたね……」

「見つかった時点でこうなると思ったよ。どうすんだよ」

「大丈夫ですよ、落ち着いてください。『聖なる加護の光よ、』」
落ち着けるかっての。

「なっ……させるか！」

しかも、シールが何か意味不明な言葉を早口で喋りだした途端、兵士が血相を変えて襲い掛かってきた。だが、シールは顔色一つ変えないで続きを言い終わる。

「『我等を外敵より守り給え！』」

瞬間。俺達の周囲を、光のドームが一瞬だけ覆った。そして、兵士達が突如、その光のドームの外に弾き飛ばされた。

次の瞬間には何も無くなったが、それでも、兵士の顔が苦悩に歪むのがわかった。一体なんだ、今は。

「く、ここまで、か」

「引いてください。そうすれば、手は出しません」

「何を戯れ事を……。俺達が退く訳無いだろう？」

「そりゃそうだよな。ここは彼等が守ってる城なんだから。」

「なら、仕方ありませんね。『光よ、その輝きを以って彼の者達に一時の暗闇を与えよ！』」

再びシールが何かを喋る。途端、視界が白に塗り潰された。

「ぎゃあああああ」

「目、目が焼けるっ！」

「いて！ 足踏むな！」

視界が元に戻った時、そこにあっただのはそんな、目が見えなくなっただのか右往左往する兵士達だった。

「さ、今のうちに行きましょう」

シールは俺にそう囁きかけると、兵士達の間を縫うようにして走り行く。俺も遅れないようにすぐに走り出した。

「……ここまで来れば……」

十分くらい走っただろうか。そこで少女は漸く止まった。

「もう、大丈夫か？」

「何とも。少なくとも先程の兵は撒けたでしょうが……」

「楽観は出来ない、か」

「まだここは敵地だからな。」

「取り合えず、走っているうちに見覚えのある場所まで来ましたの
後はわかるでしょう」

「そうか……」

まあ、どちらにしても俺はシールについていくしか手はないんだ
けどさ。

そして、俺達は再び慎重に歩きはじめた。

不思議とそのあとは一人として兵士と出くわすことはなかった。

だが、あと僅かでの城から出ることが出来る、というときに、
そいつは現れた。

「わざわざ遠回り、ご苦労様。御蔭で待ち伏せするのに十分な時間
をもらえたわ」

そいつらは、城の玄関口で、待ち伏せしていた。黒いローブを纏
った集団が、待ち伏せをしていたのだ。

どうやら、俺達は正解の道を歩んでいたどころか、すっかり回り
道をしてしまったらしい。

そして、俺達が身構える前に、つい今しがた声をあげた女性が、
続けてシールにむけて言葉を放った。

「クスクス……。脱獄しちゃダメじゃない、可愛い巫女さん」

「フレイ、ア……？」

隣にいるシールが緊張しているのがわかる。どうやら知り合いの
ようだが……俺にとってはそれどころではない。

先程の戦闘でもう魔術が実在すると信じざるを得なくなったが、
どうやら今回は相手もその魔術を扱うらしいことが、武器を持って
いない点から伺えそうだ。

その上、俺は戦力にならない。今度は、一筋縄ではいかなそうだ。

でも、例えそうだとしても、それでも意地はある。やれるだけやってやるさ。そう思い、我流で構えをとった。

私の放った真剣な言葉を聞いて、男もまた私の問いかけに答える姿勢になったようだ。

なので、早速私は問いかけた。

「この世界の名を、言ってみてください」

この世界に住むこの人くらの年齢の人なら、誰もが答えを知っているであろうその問いに、男は、

「地球、かなあ。世界の名前なんて、考えたことないし。強いて言えば、住んでいる惑星の名前が、そうなるのかな？」

と答えた。念のために偽りではないかと聞いてみたが、答えは寧ろ、

「え？ な、何だよ急に。変なこと聞いてくるな……」

と、かえって訝しそうな内容だった。これは間違いなさそう。

彼は、恐らく。何らかの要因によってこの世界に漂流してしまった、異世界からの遭難者だ。だが、彼は気付いていない。もしくは薄々は感づいているかもしれないが、無意識のうちに考えないようになっているのかもしれない。だったらまず、そのことに気づかせないと、いつまで経っても話は進まないだろう。

だから、受容出来ないだろうけど、話しておこう。

「そうですね……。真に残念なのですが、結論から言わせていただくと、ここは地球という世界ではありません。故に、貴方の故郷も、ここにはありません」

「え……………？ は、はは。冗談は、止してくれよ……。地球じゃなけりゃ、ここは何処なんだよ」

予想通り、彼は聞き入れてはくれない、か。なら、この世界の、そしてこの国近郊のことを知ってもらって、何とか受け入れてもら

おう

「ここは、える」

「そこで何を……貴様は！」

そう思い、まずはこの世界の名前を教えようとした時。重要なことを忘れきっていたことに、私は気付いた。

「……………っ！ しまった！ 見つかつてしまった……………！」

「だ、脱走だー！ 一級犯、シール＝デストラクティが脱走したぞー！」

そうだ、私、今は絶賛脱走中じゃない！ こんなところで何見知らぬ少年論してるのよ。

「あの、どうすんの、これ」

慌てた男が聞いてくる。もちろん逃げるに決まってるじゃない！

「……………取り合えず、逃げます！ こちらへ！」

「道わかるのか！？」

大丈夫、だと思いたい。少なくとも装飾を見る限りは私が何度か入ったことがある……………王城。

だが、そこで問題があるのだ。

「装飾を見た限り、ここは王城……………。私は幾度か城への所用で出入りしたことがあったので、幾分はわかりますが……………わかる区域までの辛抱です！」

そう。私は牢屋のある区画など当然踏み入れたことなどない。所用というのは軍部にいる知り合いの手伝いで、幾らか城内をうろついていたことがあるくらいだ。

とにかく、戦闘はすべきじゃない。ここはとにかく撒かないと。

「どうやら不審者の手を借りて脱走したようだが……………逃げられると思うなよ、シール＝フェルスファイア！」

って、しまった！ 騒ぎを聞き付けた他の衛兵がもう駆け付けてきてしまったか！

「くっ！ 囲まれましたね……………」

もう戦うしかない、か。まあ、逃げ切るためならそれもためらわ

ない。

「見つかった時点でこうなると思ったよ。どうすんだよ」

無論、抵抗するに決まってるじゃない。それにただの兵士に負ける気はしない。だから落ち着いて頂戴、少年。

「大丈夫ですよ、落ち着いてください。『聖なる加護の光よ、』」
「なっ……させるか！」

無駄だよ、衛兵さん達。私がこれを詠唱し始めた時点でもう手遅れ。

「『我等を外敵より守り給え！』」

ほら。私に触れる前に、もう聖なる守護防壁は完成した。

「く、ここまで、か」

「引いてください。そうすれば、手は出しません」

「何を戯れ事を……。俺達が退く訳無いだろう？」

ま、そうよね。捕まえるべき相手がすぐそこにおいて、敵前逃亡する馬鹿はそうはいない。私もそれくらいの予想はしていた。

「なら、仕方ありませんね。『光よ、その輝きを以って彼の者達に一時の暗闇を与えよ！』」

でもこの人達に罪はない。だから、私は目眩ましをして無力化を図った。

「ぎゃあああああ」

「目、目が焼けるう〜！」

「いて！ 足踏むな！」

うん、結果は上々みたいね。じゃ、少年。

「さ、今のうちに行きましょう」

いつまでも呆けてないで、さっさと行きましょう。

「……ここまで来れば……」

「もう、大丈夫か？」

しばらく走り続けて、先程の衛兵が追い掛けるのに困難なくらいは突き放したと思うけど……。何とも言えない。まだ逃げきったわ

けじゃないのだ。

「何とも。少なくとも先程の兵は撤けたでしょうが……」

「楽観は出来ない、か」

ま、走ってるうちに私の知る区域までたどり着いたし、後は迷う心配もないでしょ。そのことを少年に伝える。

「取り合えず、走っているうちに見覚えのある場所まで来ましたの
後はわかるでしょう」

「そうか……」

少年も安堵したようだ。

そして、私たちは再び歩きだした。

だが、直ぐに不審なことに気が付いた。今頃、第一級犯が逃げ出したというところで城中大騒ぎだと思っただが、何故か先程の衛兵との遭遇以降、一人として出会うことがなかったのだ。

だが。城の入口付近で、その理由を窺い知ることになるとは思っても見なかった。

先回りされていたのだ。しかも、相手は良く訓練された魔術師のみで構成された『精鋭魔術師隊』だ。なるほど、無駄に犠牲者を出すよりは精鋭を待ち伏せさせて対応した方がいいかもしれない、か。私一人じゃ歩が悪い。その上、この男も戦力になりえるとは言えない。

さて、どうするか、と身構えた、その時。

「わざわざ遠回り、ご苦労様。御蔭で待ち伏せするのに十分な時間をもらえたわ。クスクス……。脱獄しちゃダメじゃない、可愛い巫女さん」

「……………っ！」

すぐく聞き覚えのある声に、私は背筋が凍るような感覚に襲われた。

慌ててを見合わせば……いた。見間違いじゃない。

「フ、レイア……？」

……そんな、嘘、でしょう。貴女の部隊が、相手だなんて……。

貴女となんて戦いたくないよ……。

1 - 4 城からの脱出 戦闘編

一言でいえば敵意。私が良く知るはずの人物からは、それしか感じ取ることが出来なかった。

「あがつ!？」

バチツという音とともに横で突然うめき声が上がって見て見れば、そこにはいつの間にか後ろに回り込んでいた魔術師隊員と彼等に押さえられている男の姿が。

そして、隊員はそのまま私を……捕縛することなく、離れていった。

「大丈夫ですか!？」

「あ……く、痺れ、た……」

慌てて声を掛けるが、軽く痺れただけなようだ。だが、がっしりと押さえ込まれている。あれでは脱出は不可能だ。

急いで助けに行こうと思ったが、

「待っていて下さ」

「おっと、下手な真似でね? さもないと……『炎よ、弾となりて彼のものを焦がせ!』」

それは出来なかった。

私が詠唱をしようとする間もなく。私たちを包囲する一団の隊長、フレイアの手から放たれた火弾は寸分違うことなく、吸い込まれるかのように（実際、魔術にはある程度の追尾性があるのだが）男の胸に命中した。

「うぐうあああああ!」

「……………っ!」

思わず、呻いてしまう。あの威力であれば、威嚇程度で、避けることも容易な魔術。辺り所さえ悪くなければ軽度の火傷で済むはずのそれは、しかし急所を見事に捉えており。

男は見るからに重度の火傷を負ってしまった。意識があるのが奇

跡的なくらいだ。

「次、妙な真似したらもつとすごい魔術放つから」

「……………くっ、」

フレイアの放ったその言葉に、私は動きを止める。

そんな、嘘でしょう、フレイア。

男の命が惜しい、というのもあるかもしれない。いや、事実、少なからずそう思っている。何故なら、私にとつても彼にとつても不本意だとはいえど、私は彼を巻き込んでしまったし、そのうえで彼は私の命の恩人なのだ。恩人を助けたい、死なせたくない、と思うのは当然のことだと思う。

でも。それ以上に私の心を締め付けるのは、別のことだ。

「どうして…………？」

「ん？ 何？」

彼女は、フレイアは私の親友ではあるがそれでも精鋭魔術師部隊ベテランの兵なのだ。それも、何か私情があつても、仕事においてはその私情を殺せる程に誠実な人だ。

そして、そういった立場上、彼女は罪人に対しては確かに見逃しはしない。

でも…………。

でも！ 例え見逃したりはしなくつたつて！

「貴女はそんなに残忍なことする人じゃなかったじゃない！」

気さくな人で、出会いは私が街のごろつきに絡まれている時だった。それから仲良くなつて…………少し前、三ヶ月くらい前までは、公休日の度によく遊びに来てくれていた。

最後にあつた、その三ヶ月くらい前。それから少し姿を見ない間に、こんなにも、別人のように変わってしまうなんて…………。

どうして。貴女に、何があつたつていうの？

ねえ…………。

「戻つて、よ…………」

「戻つてつて…………何に、かしら？」

「元のフレリアに戻って！」

「元の、って言われても、ねえ」

何を言っているのかわからない、という感じで呆けているフレリアに構わず、私は続けた。心のそこから、思いの丈を叫んだ。

「貴女は確かに罪人を見逃したりはしていなかった。でも、それでも確かに、罪人にだって存在する人権を、尊重して接してた！」

でも、今のあのフレリアは違う。明らかに人権を考えていない。じゃなければ、既に無力化している人を人質に使って無理矢理言うことを聞かせるなんてしないはず。まして、既に無力化している人に対して命にかかわる攻撃をするなんて、絶対におかしい。

「何で！ どうして貴女はそんなに変わってしまったの！？」

ホールに、私の叫び声が響いた。それはずいぶんと長い間響きつづけた気がする。

でも、それ程の声で叫んでも、

「戯れ事はそれでおしまい？ じゃ、さっさと牢屋に戻りましょうか？」

冷酷な、感情を一切殺した声でそういつてきた。つまりは否定だった。

……………そう。貴女は、もう、私の知るフレリアじゃ、ないんだね……………なら……………私にも躊躇する理由はなくなる。

私は心が悲しみに満たされていくのを感じながら、戦うために、抑えていた魔力を解放した。

「『光よ、彼の者達を眩ませ！』」

「なっ!？」

人質を取られていて、もはや抵抗することはないかと思っていた矢先のことなのか、精鋭魔術師隊の隊員達はいきなりの私の目眩ましに驚き、目を瞑って防いだものの、私にとっては十分過ぎる隙を与えた。

今のうちに、私を助けてくれた男を奪還しないと！

「『聖なる加護の光よ、』」
私は詠唱をしながら男に駆け寄る。

「く、『鋭き氷の槍よ』」
だが、いち早く復活したフレイアが私の行動を阻止しようとしてくる。

それも、未だに人質にとった彼に対して。どれだけ卑劣になったつていうの!? でも、もう止まらないんだから。

「『我等を外敵より守り給え!』」
「『彼の者達を貫け』」

互いに詠唱していた魔術が、ほぼ同時に発動する。といっても私の方が若干遅かったけど。

私の魔術は、私と、私と逃げてきた男を覆う結界を形成。一方彼女の魔術は氷の槍で相手を貫くものらしいが、意外なことに男だけでなく、私も標的にしていたらしい。だが、結界の形成速度の方が上をいった。

詠唱通りに氷の槍が私たちを刺し貫くその前に、結界によって掻き消されたのだ。

「これで、形勢は逆転ね……」
「く……っ」

神職者、それも巫女や神殿の主といった深いところまで携わる神職者にしか扱えない魔術のことを総じて『聖属性』というのだけど、その中でもこの『聖なる守護防壁』は全魔術の中でもトップクラスの防護結界ということまで有名だ。何せ、術者が気絶しない限りは術者が認めた如何なる害悪も弾くのだから。

弱点は、結界のダメージが術者の精神に揺らぎを与える、といったところね。

ともあれ、先の逃走にも使ったこれが再び発動した以上、もう私の勝ち揺るがない。

「逃げられると、思ってるの?」

「逃げ切って見せるわ」

「随分な自信ね……そっちには負傷者もいるのよ？」

「なら追っ手を出せなくするまで」

「何ですって？」

そう。いくら私達が逃げたところで相手は国。追っ手などいくらでも来る。なら、追っ手を出せなくらいの痛手を負わせればいい。まあ、不可能ではない。因みに殺すわけじゃない。

「冗談は止しなさいな。いくら貴女が巫女でも、この城は大きい。これだけの広範囲に散ってる兵士達に、それだけの痛手を負わせる力なんてあるわけがないわ」

普通の巫女、ならね。でも、生憎と私は普通の巫女じゃない。

可能だと断言できる理由がある。

それは私が一種の特異体質だからだ。私は、生れつき特定の属性以外の魔術に関しては、常人の数倍の魔力を余計に消費しないと魔術が発動しない。それもそうした上で威力は通常の半分以下という徹底ぶり。

でも、その特定の魔術についてはその限りではない。それは、今使っている聖属性と闇属性。

このうち聖属性はそれほど問題じゃない。私にとっては数少ない、通常の魔力消費で通常の効果が得られる属性、というだけだ。まあ、普通なら寧ろこの場合が普通なのだけど、まあそれは割愛。

問題なのはもう一つ、『闇属性』についての方だ。

どういうわけか闇属性は他の属性以上に厄介で、他の人が使うときに比べて、数分の一の消費魔力で数倍の効果が得られてしまう。だから、これももう一つの理由があって、闇属性についても満足に扱うことは出来ていない。

けど、今回はそれを気にして入られない。寧ろ、そうであってくれてよかったくらい。

さあ、今こそ。

覚悟を決めて、私を救ってくれた男を信じて。苦肉の策を、解き放とう。

「『闇よ、善悪一体の力よ。我が怨敵には苦痛を与え、我と我が朋友には治癒を施せ』」

基本、決まった詠唱のある魔術は基礎だ。それ以外は術者のオリジナル。

そして私が前に即興で考えて作り出したこの詠唱は、多分、この世界における闇属性の特性を体現するであろう詠唱だと信じている。そして、この状況を打破してくれる、とも。

残念なのは……生憎と私は結果を知ることが敵わないこと、かな。私はこの魔術が成功したかどうか、知ることは出来ない。何故なら私が闇属性を使うと、先程の利点の代わりに、とてつもない代償を払わなければならぬからだ。それは……。

「……う……くう、はあ、はあ……ぐう……っ」

私が闇属性を扱うと、何故か体が拒絶反応みたいなのを起こして、とてつもない苦痛に見舞われて。何時も、意識を失ってしまうのだ。だから、私にとっては出来れば使いたくない属性だった。

斯く言う今回も、襲ってきた苦痛に耐え切ることが出来ず。

結局、私は敢え無く、意識を遮断してしまった。

全く……ついてないな。わけわかんない罪で、第一級犯にされて、牢屋に押し込められて。揚げ句の果てには親しかった親友の変貌ぶりに驚かされた。

全く、何がどうとは一概には言えないけど、とにかくついてない。

「はあ……ついてないな、本当に」

「……ええ、本当に、ね……」

いつの間にか、意識が覚醒していたらしい。聞き覚えのある声に、無意識のうちに反応していた。

見た感じ、ここはどっかの廃屋のようだ。どうやら、無事城から抜け出せたらしい。この男には、感謝しきれないな。

そもそも、この男が空間の歪みから現れてくれなければ、今も私は暗い牢屋の中。そしてその先には絞首台。それを考えると、本当

に、何から何まで、そんな間違った運命から脱出させてくれたこの男には感謝しきれない。

……そういえば、この男には、話すことがあったっけ。

ちよつと一段落したみたいだし、そろそろ落ち着いて話せるかもね。

そう思い、まだ痛む頭を抑えて起き上がると、私は男に向き直った。

1 - 4 . 5 城からの脱出 脱出後

突然襲ってきた灼熱は、容赦なく俺の胸を焼き尽くした。先程の『魔術』によるを電撃に加えてこの炎。やっぱり、さっきの雑兵とは桁が違うのか。

俺はこの痛みに堪えるのに精一杯だった。意識も朦朧としていて、シールと隊長らしき人物との会話も、聞こえていても殆ど聞こえていないに等しかった。

どれだけの時間が経っただろう。不意に、体がすうーっと楽になつていくのを感じた。

「う……あ、何、だ、これ、は……？」

朦朧としていた意識も、だんだんしつかりしてくるのを感じる。意識が完全にはつきりとして、俺が見たもの。それは、

「暗い………」

闇。見渡すことの出来ない、自分の手や足すらも確認することが出来ない漆黒。でも、それでいて何かに守られているような安堵感と、安らげるような心地よさを感じる、優しい闇。

しかしここは何処なんだろう。手足が確認出来ないほどの闇となると……下手に動かないほうがいいのか？

しばしどうすべきか考えていると、

『……その、貴方……』

不意に聞き覚えのある声が聞こえてきた。一緒に行動してた、シールの声だ。

声の方へ向いてみれば、ぼんやりと光っていて半透明ではあるものの確かにその姿を見ることが出来た。

「何だ？ というかここは？ それにその体は？」

『クスクス……。少年、君は少しせつかち過ぎるよ。焦る気持ちもわかるけど、落ち着いて。時間は有限なのよ？』

さつきとはずいぶん物腰の違う……ってかこつちが素なのか？
随分と誑しつぽい性格だな。

『ここは私の魔術、「断罪者の福音」による効果で出来た擬似的な貴方の精神世界。そして私はシール＝フェルスフィアの深層意識でも、過剰な魔力が貴方の精神世界に流入したことによる擬似的なもので、本体が意識失っている以上、リンクが切れているから本体は本来記憶できるはずのこの出来事を記憶として認識出来ないのだけだね』

ウーン？ どういうことだ？ ここは俺の精神の中、で。このシールは擬似的な存在。それまではまあ、何とかわかるけど、それ以降は何かようわからん。

「えっと……つまり？」

『私は過剰魔力の集合体。故にこの消失とともに消え去る。勿論本体に影響はないんだけどね。で、このことを覚えていられるのは貴方だけ。わかった？』

うん、何とか。

『そう、それはよかった。物覚えが速いのはいいことだよ少年』

「……それって素なのか？」

今までの話し方からすると、妙に神泉っていつか何て言うか……
今まで大人ぶってたのな。

「今まで大人ぶってたのな」

『うっさい！ 時間は有限って言ったでしょう！ ほら、もう光が差し込み始めた』

「光……？」

『日が上れば夜は開けるでしょう？ それと同じこと。ここの展開時間に限界が来ているの』

「そうか……」

みれば、シールの体の透過度が増しているのがわかる。

『要点だけ伝えるね。意識がない私の本体を街中の、安全で人に見つかりにくい場所に運んでほしい。路地裏でも探せば廃屋とかすぐ

に見つかるはず』

「何で意識がないんだ……？」

『それは本体から直接聞いて。もう時間だから……』

そう言つて、シールは消えた。と同時に、眩しい光に包まれ、思わず目を閉じた。

次に視線を開ければ、そこには先程の城の玄関ホールがあった。そこには先程まで対峙していた、数多の兵が倒れ込んで、うめき声をあげていた。こ、恐え〜。

そついや「断罪者の福音」つて言つてたっけ。俺の火傷が完全に癒えてるつてことはあれか、治療と攻撃の一体化か？ 魔術つてマジパネエな。

「シールは……いた！」

顔が苦悶に歪んでいる。どうやらかなりの苦痛を味わつた見たいだが、目立つた外傷は見られない。ということは………どうということだ？

とにかく、シール連れてここから出ないとな。

シールが言つた通り、目立たなそうな所は手近な路地裏に入つてしばらく歩き回れば、簡単に見つかった。

如何にも廃屋っぽい小さな建物がいくつも見付かつたのだ。

でも何でこんな路地裏に廃屋が密集してるんだ？

とにかく、それらの内の一つに入り、シールを床に寝かせた。ベツドとか布団とかないのだからこの際仕方ない。

「……腹減つたなあ」

そついえば、昼飯食う前に飛ばされて来たからなあ。朝飯食つてつから何も食つてねえ。餛飩はとでもじゃねえがそれどころじゃないから放り捨てちまつたし。ああ………勿体ないなあ。

と言つより、そもそもあれだよな。何で俺は所にいるんだ？

シールの話ではここは異世界って話だ。

最初は眉唾だろ？ って正直馬鹿にしてた。でも、その直後にシールが使った見せた閃光。物理法則を完全無視したその現象は科学では証明できない。

だが、地球に魔術なんてものはない。とすれば、信じられないけど異世界という事実を許容するしかあるまい。

どうしたもんかねえ。取りあえず元の世界に戻る手段を探さないといけないわけだけど……。それを探すにしても、俺はこの世界での常識を知らない。

直ぐには戻れない。かといって、この世界では一人では暮らせない。

結局、何か大きな厄介ごとを背負っているらしきシールに厄介にならないといけなさそうだ。

正直、さらに荷を背負わせることになるから心苦しさがある。

「はあ、ままならないな……」

でも、ほかに方法は思い浮かばない。シールを助けた時点で、他の人を頼むという選択肢は当然の如く失われている。理由は言わずもがな、だろう。罪人の脱走を手助けした奴を放っておくわけがない。それにシールは罪状がどうであれ、名目上では第一級犯罪者なのだ。いや、もうそろそろ手配犯か？ どっちも同じか。

とにかく、今の俺達には定住する選択肢はないということ。いや、直ぐにでもこの街を去るべきだろう。

そこまで（空腹を紛らすために）考えて、ふと、暗くなってきたので窓の外を見ると、もう夜の帳が訪れようとしているところだった。

ぐぎゅるるる、とでも聞こえてきそうなくらい、腹が減った。でも、何も無いのだから仕方あるまい。人間、一食や二食は抜いても大丈夫らしい。今日は何とか堪えるしかあるまい。

「それにしても……ついてない」

ああ、ついてないな、全く。

昼飯買った帰りにわけのわからん現象に巻き込まれて異世界ときた。

はぁ……どうするかね、連絡。取りようがないぞ。
母さん、心配してないかな。

警察に駆け込むだろうけど……無駄だろう。異世界に迷い込んだなんて考えもしないだろうし、考えたとしてもどうやって来るよ？

……本当に、何でこうなったかね……。

「はぁ……ついてないな、本当に」

暗くなっていく空を見上げながら、俺はそう呟いた。

「ええ、本当に、ね」

独り言にいきなり返事を返されて、驚いて声の方へ向きかえってみれば、そこには神秘的な青い瞳がこちらを見ていた。

1 - 5 解説 封印の巫女

「ええ、本当に、ね」

シールが起きぬけに俺の独り言に相槌を打ってきた。

まあ、そりゃあそうだよな。話を聞く限りじゃ確かに踏んだり蹴ったりだ。

「だよなあ。そりゃ俺もいきなり知らないところに飛ばされたあげく脱走の手伝い、何だそれはって感じだし、お前に至ってはでたらめな罪状で第一級犯罪者って奴にされたんだよな？ まさに踏んだり蹴ったりじゃないか」

「全くです……。まあ……。今は五体満足で城の外に出られただけよしとしましょう」

「……そうだな」

そう言っつて、俺達は笑い合い、そして闇へと染まりつつある空を見上げた。

「……あの、そういうえばゴタゴタしてはすっかり忘れていたのですが、よろしければお名前をお聞かせ願えませんか？ いつまでも名前を知らないとお呼びする際に困りますので」

ん？ 俺の名前、か。そういうやまだ自己紹介してなかったっけ。

「俺は神楽有馬。有馬って呼んでくれ」

「ゆー……。ま？ ゆうま……。ユウマ、さんですね。わかりました。

私はシール＝」

「シール＝フェルスファイアって言うんだろ？」

「ふえ！？ あ、えっと、その……。何で……。？」

おおつ、これはまたずいぶんな驚きようなことで。やっぱりあれか？ 清楚で丁寧な下りは普段の喋り方ではないってことか？

「ああ、ええつとな。まず、兵士がそう言っていたのとな。何か、「断罪者の福音」だっけ？ あれの効果でお前の深層意識と会話し

「ただけど……」

「え!？」

初めて知った、みたいな顔で再度驚くシール。うん、見てて和む。「そう、ですか……わかりました。では改めて自己紹介させていただきます。私は……封印の巫女を勤めさせて頂いておりますシール。フェルスファイアと申します」

「封印の巫女? その恰好から薄々はそうなんじゃないかそうなんじゃないかとは思ってたけど、なるほどな、やっぱり巫女さんだったんだ」

それなら礼節のある敬語にも納得がいく。でも、封印の巫女?

一体何するんだ?

「封印の巫女って何だ?」

「封印の巫女についてですか」

「ああ。巫女っていうとき、俺の……世界ではさ、神事に奉仕して神職を補佐する未婚の女性のことを指すんだけど、やっぱりシールとかも神事の補佐を行ったりするの?」

「……正確には違います。神事を執り行うという者という意味では正反対の存在ですから」

「……?」

どういうことですか?

「そうですね……。巻き込んでしまったようですし、貴方には話しておいた方がいいかも知れませんね」

そう言つて、シールは目を閉じて深呼吸をした。

目を開けた彼女は本当に神秘的な雰囲気を感じていて、俺は少し気圧される感覚を覚えた。

「まず、巫女について、改めてご説明します。巫女というのはユウマさんの言つとおり、神事に携わる人のことを言います。殆どの巫女は神や精霊から託宣を聞き入れ、それを民衆に伝えることを主な仕事としています」

なるほどな。神様の他に精霊って言うのがいるのか。精霊って言

うのは八百万の神みたいなもんだらうか。

「それだけではなく、民衆の生活をより豊かな方へ導くのも仕事の一つです」

ん？ 民衆を導く？ じゃあ何か？

「この世界の巫女って、事実上の権力は政治家並？」

「どうでしょう。あくまでも導くとはいえど補助。確かに契約を結んだ神や精霊に依頼する形で行使する、神通力や精霊術といった術はないことはないのですが、基本的には災害などの際にしかそういったものは使えませんから。余程のことがない限り、そういうことは殆どしません」

ふーん。ずいぶんと微妙なんだな。でも、精霊術に、神通力、だっけか？

「こんなこと言うのもアレだけどさ。巫女が悪に落ちたら、ずいぶん大変なんじゃないか？」

俺の問いかけに対し、シールは若干苦笑気味に笑って、答えた。
「……確かに、巫女の力と言うのは強大です。が、先ほども言った通り、精霊術や神通力是对応した神や精霊に依頼するものです。当然向こうにも意思はあります。明らかに誰かしらの欲にまみれた理由で行使すると、怒りを買って、繋がりが弱くなるというペナルティをもらうのです」

繋がりが弱くなる？ つまりは、精霊術とかが行使しづらくなるって言うことか？

「それって術が行使しづらくなったりとかか？」

「それもありますが、託宣をもらえなくなったりなどもあります。そして、その繋がりが弱くなった状態でさらに同じ行使の仕方をすれば、その一族は一方的に契約を切られて、二度とその神や精霊とは契約できなくなるそうです」

なるほどな。ようは迂闊には精霊術やら神通力やらの行使は出来ない、と言うことか。

この世界に置ける巫女の概要はわかった。けど、俺が聞いているの

は巫女についてじゃなくて、シールについてだぞ。

「巫女についての概要はお解かりいただけましたか？」

「ああ。で、シールはどうなんだ？ さっきは真逆の存在だって言
つてたけどさ」

俺がそう聞くと、シールはそつと眼を閉じて、

「そうです。私は真逆の存在。ユウマさん、貴方は巫女は、神職者
は神を祭る存在だと、言いましたね。では、その逆と言うのは、ど
んなものだと思いますか？」

ん？ 神職者の逆？ …… そう言えばそんなことは考えたことも
なかったな。自分で聞いておいてなんだけど、言われて初めての考
えたぞ。

神を祭るってことは神の存在を認知して崇めるってことだろ？

その逆ってことは……神を否定するって言うことだよな。

「思い至ったようですね。私の一族はとある神の存在を否定し、そ
の存在の封印を守る一族。私はその末裔に当たります。しかし、そ
れもまた、矛盾してはいますが結局は神の存在を認知し、祭るのと
同じこと。故に私も巫女として分類される、と言うことです」

…………… はい？

「よくわからないんだけど」

「要点だけわかりやすく説明します。私はとある神の封印を守って
いる。これはいいですか？」

「ああ。そこはまあ、わかった。でも、それがどうして神を祭るっ
てことに結びつくんだ？」

「神を否定すると言うことは、まず否定すべき神を認めなければな
らないでしょう？」

ん？ …… ああ！ そういうことね。わかったわかった。

「わかったぞ！ そりゃ確かにそうだよな。神の存在を認めなきゃ、
否定すべき存在がいらないことになるもんな。存在を認めた上で、否
定するってことか」

なんとなくだけど、納得できた。だが、確かに神事とは真逆だよ

なあ。

「なるほどなあ。ありがと。封印の巫女についてはわかったよ」

「わかっていただけたようで幸いです」

しかし、一つ疑問に思うのは。

「その、封印の巫女って言うのは何人かいるのか？」

封印をしてまで存在を否定する神って、一人の少女に背負いきれるものじゃないだろ、普通。何人かで封印の、要？ 見たいなものを担っているんじゃないだろうか。

そう思ったんだが……どうやら勘違いだったらしい。

「いえ。神を封印する呪縛の守り手は世界に一人しかいません。他の巫女と違い、封印の巫女、と言うのは神と契約すればなれると言うものではありません。数百年前に邪神を封印した英雄の血を引く一人の人間から始まっていて、代々長女がその役割を引き継いできています」

何てことを言ってきたのだから。

てか、その英雄ごんだけ自分の子孫に重い役を持たせてんだよ。

少しは分担つてものをさせろよ。

でも、同時に何となくわかってきたような気がする。

「なあ……今回シールが捕縛されたのって、出鱈目な理由から、だよな」

頭痛に頭をしかめながら、男に向き直ると、男は若干驚いたような顔をしている。

あれ？ 何で……って、そりゃそうか。

すっかり意識を失っていると思つて一人事を遠慮なく呟いていたら無意識だったとはいえいきなり返答を返された。それは驚いてもおかしくはない状況だ。君は悪くないよ、少年。

で、改めて振り向くと、今度は何故か納得したかのような顔で、

こう言ってきた。

「だよなあ。そりゃ俺もいきなり知らないところに飛ばされたあげく脱走の手伝い、何だそれはって感じたし、お前に至ってはでたらめな罪状で第一級犯罪者って奴にされたんだよな？ まさに踏んだり蹴ったりじゃないか」

「全くです……。まあ……。今は五体満足で城の外に出られただけよしとしましょう」

「……そうだな」

私達は頷きあって、互いの無事を喜び合いながら夜空を浮かべた。そういえばこの男、いつの間にかここが自分の世界じゃないってことを受容してる。いつの間に？

まあ、勝手に理解してもらえれば、それはそれでこっちの手間が省けるからいいんだけどさ。

……。あれ。ふと思っただけけど、私達、お互い自己紹介してなかったわね。よくそれでここまで来れたものだ。私たち自身のことなのに、思わず感心してしまうな。

でも、いつまでも名前を知らないままではまずいと思う。ここらで自己紹介タイムと行きましょうか、少年。

「……あの、そういえばゴタゴタしてすっかり忘れていたのですが、よろしければお名前をお聞かせ願えませんか？ いつまでも名前を知らないとお呼びする際に困りますので」

男、改めてユウマさんはそう言えば、と言う顔で自己紹介（と言っても名前だけだが）に応じてくれた。

「俺は神楽有馬。有馬って呼んでくれ」

何か、呼びづらい名前ね。

「ゆー……。ま？ ゆうま……。ユウマ、さんですね。わかりました。私はシール」

「シール」フェルスファイアって言うんだろ？」

「ふえ！？ あ、えっと、その……。何で……？」

いきなり私の自己紹介にかぶせられた。しかも、あれ？ 私、自

己紹介してなかったよね。なんで知ってるの？　いつ知ったのさ、少年。

「ああ、ええつとな。まず、兵士がそう言っていたのとな。何か、「断罪者の福音」だっけ？　あれの効果でお前の深層意識と会話したんだけど……」

「え！？　そうだったんですか！？」

すっかり忘れてた。そう言えば確かに衛兵達は私の名前をしつかりと呼んでたっけ。

それと後半。そんなことがあったなんて、それ、初めて知ったわよ。おかしいなあ。確かに治療魔術に余分に込めてしまい、使いきれなかった余剰魔力があれば、閥属性の治療術はその侵食の特性を持って相手の深層意識に入り込むことが出来るらしいけど……ああ、そっか。気を失ってたから擬似的な私の意識とのリンクが切れてたんだ。

なら、私が知らなくっても当たり前だったわね。

でも一方的に自己紹介されっぱなしと言うのも居心地が悪いから、やっぱり自己紹介はさせてもらおうかな。

「そう、ですか……わかりました。では改めて自己紹介させていただきます。私は……封印の巫女を勤めさせて頂いておりますシール
「フェルスファイアと申します」

「封印の巫女？　その恰好から薄々はそうなんじゃないかそうなんじゃないかとは思ってたけど、なるほどな、やっぱり巫女さんだったんだ」

む？　巫女って、そっちの世界にもいたんだ？　どんな感じなのかは同じ巫女として興味をそそられるわね。

ユウマは続けて、私にこう質問して来た。

「封印の巫女って何だ？」

「封印の巫女についてですか」

「ああ。巫女っていうとさ、俺の……世界ではさ、神事に奉仕して神職を補佐する未婚の女性のことを指すんだけど、やっぱりシール

とかも神事の補佐を行ったりするのかわ？」

うーん。なかなかのをついた質問の仕方をするのね、少年は。でも、ちょっと難しいな。何て言えばいいのかわ……。

神事って言うのは神を祭ることですよ。でも、私はそれとは対極に当たる存在なのよねえ。何て答えよう……。

うーん……。

「……………正確には違います。神事を執り行うという者という意味では正反対の存在ですから」

「……………？」

やっぱり伝わりにくかったかな。もう少し詳しく説明しよう。それに、何かこの少年は私が知らないうちに抱え込んだ厄介事に見事に巻き込まれてくれちゃったようだから、最後まで面倒を見る必要がありそう。

「そうですね……。巻き込んでしまったようですし、貴方には話しておいた方がいいかも知れませんね」

深呼吸をする。今まで以上の神職者としての対話をするために、意識を切り替えるためだ。

封印の巫女に着いて詳しく知ってもらうためには、まずは普通の巫女について知ってもらわなくてはなるまい。まずはそこからだ。

「まず、巫女について、改めてご説明します。巫女というのはユウマさんの言うとおり、神事に携わる人のことを言います。殆どの巫女は神や精霊から託宣を聞き入れ、それを民衆に伝えることを主な仕事としています。それだけではなく、民衆の生活をより豊かな方へ導くのも仕事の一つです」

ユウマさんは所々で相槌を打ちながら聞いていたが、何処か気になることがあるのか、一つ質問をしてきた。

「この世界の巫女って、事実上の権力は政治家並？」

いや、何故そうなる？ 普通そこまで極端な解釈をするかな。神職者が豊かな方へ導くって言ったなら、普通はボランティア活動とかが一般的だと思うんだけど……。

とはいえ、そんな考えを今はつきりというのは私的にはあんまり好ましくない。だからやんわりと答えることにする。

「どうでしょう。あくまでも導くとはいえど補助。確かに契約を結んだ神や精霊に依頼する形で行使する、神通力や精霊術といった術はないことはないのですが、基本的には災害などの際にしかそういったものは使えませんから。余程のことがない限り、そういうことは殆どしません」

「こんなこと言うのもアレだけどさ。巫女が悪に落ちたら、ずいぶん大変なんじゃないか？」

再び、ユウマから質問があがる。が、今度はごもつともな質問だ。まあ、それ以前に、そんな人はそもそも巫女でいる資格すらないのだし、普通なら侮辱に値するかもしれない。

「……確かに、巫女の力と言うのは強大です。が、先ほども言った通り、精霊術や神通力は対応した神や精霊に依頼するものです。当然向こうにも意思はあります。明らかに誰かしらの欲にまみれた理由で行使すると、怒りを買って、繋がりが弱くなるというペナルティをもらうのです」

ユウマさんは少し考えて、
「それって術が行使しづらくなったりとかか？」

自分なりの解釈を口にした。正しくその通りである、と私は聞いている。けど、それだけでは不十分だ。神や精霊と繋がってもらえる物は他にもある。繋がりが弱まるとは、それら全てがもらいづらくなるということなのだから。それを捕捉する。

「それもあります。託宣をもらえなくなったりなどもあります。そして、その繋がりが弱くなった状態でさらに同じ行使の仕方をするれば、その一族は一方的に契約を切られて、二度とその神や精霊とは契約できなくなるそうです」

理解した顔になってくれた。何よりだ。念のために、確認をしておくかな。

「巫女についての概要はお解かりいただけましたか？」

「ああ。で、シールはどうなんだ？ さっきは真逆の存在だって言
ってたけどさ」

そうね……。私はある意味、真逆の存在。ユウマさんが知りたい
のはその詳細だろうけど、多分、もう半分は気付いているんじゃない
かな。

「そうです。私は真逆の存在。ユウマさん、貴方は巫女は、神職者
は神を祭る存在だと、言いましたね。では、その逆と言うのは、ど
んなものだと思いますか？」

ユウマさんはしばらく考える素振りを見せた後、もしかしたら、
と言いたげな顔で私を見て来た。私は頷いて、

「思い至ったようですね。私の一族はとある神の存在を否定し、そ
の存在の封印を守る一族。私はその末裔に当たります。しかし、そ
れもまた、矛盾してはいますが結局は神の存在を認知し、祭るのと
同じこと。故に私も巫女として分類される、と言うことです」

理解不能。何言ってるのこの子は、と言う顔をされた。

「よくわからないんだけど」

言われなくともその顔はそう言っているも同然でしょ、少年。ま
あ、少し難しい説明だったかもしれないから砕いて説明することに
する。

「要点だけわかりやすく説明します。私はとある神の封印を守って
いる。これはいいですか？」

「ああ。そこはまあ、わかった。でも、それがどうして神を祭るつ
てことに結びつくんだ？」

ん。わけがわからないのはそこね。なるほど、矛盾しているけど
神を存在を認知して祭るのと同じって言うところで引っかかって理
解できなかったってこと。

でも、そこは理解して欲しいなあ。

「神を否定すると言うことは、まず否定すべき神を認めなければな
らないでしょう？」

ユウマさんは少し考えた後、思い至ったのかハツとした顔で私に

向き直り、こう言ってきた。

「わかったぞ！ そりゃ確かにそうだよな。神の存在を認めなきゃ、否定すべき存在がないことになるもんね。存在を認めただ上で、否定するってことか」

うん、そういうこと。私が言いたかったことはもう全て言い終わっただし、理解もしてくれたように本当に何よりだ。

「なるほどなあ。ありがと。封印の巫女についてはわかったよ」

「わかっていただけただようです」

だが、ユウマさんはまだ気になることがあるようだ。

「その、封印の巫女って言うのは何人かいるのか？」

……なるほど。そう来たか。でも、残念ながら、封印の巫女って言うのは寂しいもので、この世界で唯一無二、今代は私一人しかない。後にも先にも、封印の巫女と言うのはその代につき一人しかないのだ。

その理由と言うのが、

「他の巫女と違い、封印の巫女、と言うのは神と契約すればなれると言うものではありません。数百年前に邪神を封印した英雄の血を引く、一人の人間から始まって、代々長女がその役割を引き継いできています」

と言うことなのだから。まったく先祖様も無茶なことを押し付けてくれたものだ。もう少しこう、封印の要と言うのかな。そんなようなものを分散させて背負わせてもよかったですんじやない？

その封印の要となるのがなんなのかは知らないけど。

派閥割れして封印が解けるのを恐れたのかどうなのかは知らないけど、せめて少数人数にでも分けてくれればよかった。

そんなことを考えていると、ユウマさんも何かを考えていたのか、不意にこんなことを聞いて来た。

「なあ……今回シールが捕縛されたのって、出鱈目な理由から、だよな」

……ん？ なんだろう。何か、ものすごく冷や汗が流れてるわよ、

少年。

私は少し、嫌な予感を感じた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3852z/>

異世界逃避行幻想譚～異世界人と巫女達と神々と時々邪神～

2011年12月27日00時52分発行